

# ☆☆☆ Library Eye 2021 ☆☆☆

第14号 2021年5月1日(土)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



## 【新入生オリエンテーション♪】



新年度が始まり、新入生に向けてオリエンテーションを行いました。

昨年はコロナ禍の影響で分散登校や遠隔授業が多く、登校日が少なかったため図書館ガイダンスの時間が取れず、初めて借りに来てくれた生徒にその都度利用案内をすることになり、夏を過ぎても初めての利用でまごついてしまう様子でした。

今年嬉しいことに、ガイダンスを待ちきれずに、入学後の1週間で何人もの新入生が本を借りに来てくれました。新入生にとっては、圧倒的な蔵書数や重厚な空間にワクワクするようで、どの生徒も目がキラキラしています。オリエンテーションでは、本の貸出・返却の方法や、図書館利用のマナーなどを簡単に説明した後、練習を兼ねて一人に一冊ずつ本を貸し出しました。多くのお子様が好きなお本を真剣に選んでくれて、とても嬉しく思います。

## 【プチリニューアルしています！】

図書館は2018年度のリニューアルオープン以来、「進化中」で、今年度もプチリニューアルをしています。その一つが、表紙を見せるディスプレイを増やし、おすすめ本を手に取りやすくしたことです。発行年数が古く、貸し出しされていない本を大幅に閉架書庫へ移動し、スペースを作りました。特に料理とお菓子の本は本格的なレシピ本が多かったので、半数近くを書庫に移し、カンタン・ずぼら・手抜きといった今どきの本を中心にしました。その他には、英検・漢検などの検定本を集めてコーナーを作ったり、歴史もののコミックが増えたため、コミックコーナーを増設したりしています。掲示やサイン、展示なども新しくしました。より利用しやすく、読みたい本が見つかる図書館になっていますので、本の貸出だけでなく、自習や読書、リラックスできる空間として活用してもらえたいことを願っています。



## 【ホームページから図書館情報を発信します！】

学校のホームページに、図書館のページを開設しました。トップページ上部の「学校生活」から「図書館」をクリックすると、ご覧になれます。

図書館の利用案内や館内案内のほか、月に1回発行する「新着図書案内」も翌月の初めにアップしていきます。また、旬の話題に関する本や季節を感じる本など、展示コーナーの紹介も随時更新する予定です。図書委員会の活動や、館内のイベントなど、図書館での活動や様子を発信して、保護者の皆様にも図書館を知っていただきたいと思います。この図書館だより『Library Eye』のバックナンバーもお読みいただけます。

ぜひ、ご覧になってください。

## 【子どもを不幸にするいちばん確実な方法とは？】

「子どもを不幸にするいちばん確実な方法は何か、それをあなたがたは知っているだろうか。それは、いつでもなんでも手に入れられるようにしてやることだ。」

(『エミール』 ジャン・ジャック・ルソー)

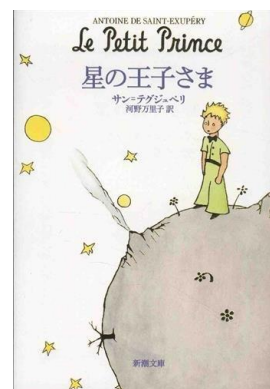
『エミール』は今から260年ほど前に著された教育論ですが、この言葉は、モノを与えることと愛情を施すことを混同している現代文明に対する警鐘とも言うべきものでしょう。また、物を買って与えることだけにとどまらず、これでもかというほどに大人が子どもたちの先回りをして何でも用意してしまうことも注意しなければなりません。

私たち教師も、ともすればすべてお膳立てをしてしまっ、そのレールの上を生徒たちが進んでいくことを期待し、すこしでも逸れると、すぐに軌道修正を図るでしょう。

明星学苑の創業者である児玉九十先生は『両親教育』という著書の中で与謝蕪村の「菊作りは菊の奴かな」という俳句を挙げて「教育家は、生徒の下僕のような気持ちになってこそ、ほんとの教育ができる」と語っています。

現在は、忍耐力や教養、コミュニケーションスキルといった「見えない学力」が重要視されていますが、「見えない学力」があるなら「見えない指導力」というものもあっていいはず。たとえば、けっして「折れない心」を培った部活動を通しての指導や、厳しい方へと一歩を踏み出す勇気を与えた先生のアドバイスなどがそうでしょう。

そうした黒子のような働きは人目につきません。先生が「～してくれたからできた」ではなく、たとえ背中を押す手が添えられていたとしても、生徒たちが「自分のチカラでできた」と思うようにするのが私たち教職員の仕事です。幼い頃、初めて自転車に乗ることができたときに、うしろで支えてくれていたはずの親が、いつのまにか手を放してしまっていたように、『星の王子さま』に出てくるキツネが言うように、いつの世も「いちばん大切なことは、目に見えない」のです。



## 【探求型学習元年を迎えて】

『果てしない物語』や『モモ』などで知られるミハエル・エンデが、「考えさせられるふたつの答え」という文章の中で、次のようなエピソードを紹介しています。

①中米の発掘調査に出かけた研究チームが荷物を運ばせるためにインディオのグループを雇ったところ、初めの4日間はとてもよく働き、日程は予想以上に捗った。ところが、5日目になると、インディオは全員が輪になって地べたに座りこみ、黙ったままテコでも動かなくなりました。調査団の人々が賃金アップを提案したり、ついには武器で脅したりもしたが、まったく効果はなく、お手上げの状態となった。と-----。突然、2日後に全員が立ち上がると、荷物を担いで前進を始めた。ずっと後になってインディオの一人が、その理由を語った。

「はじめの歩みが速すぎたのでね。わたしらの魂があとから追いつくのを待っておらねばなりませんでした」

②Aさんがインディオの住む山村に行ったところ、山に真に住む女性たちが毎日30分かけて山の麓まで下りていき、水を水甕に汲むと、今度は1時間もかけて山を登っていく光景を目にした。そこでAさんは、いつそのこと村を水源近くに移動したほうが賢明ではないか、と提案した。すると、その女性は、こう答えた。

「そう、確かにそのほうが賢明かもしれません。でも、そうしたら私たちは快適さという誘惑に負けることになります」

時間に追われ、数字に追われ、流行に追われる、まさに狂気とも言うべき競争社会に生きている私たち「文明人」は、人間として最も大切な何かをどこかに落としてきてしまったのかもしれない。

私たちが快適な生活を求めれば求めるほど、母なる地球はダメージを受けます。

本年度、スタートした探求型学習においてSDGsの問題に真正面から取り組むことになる明星の生徒たちは、どのような実践を見せてくれるのでしょうか。

